

～子どもから大人まで簡単にできる～ 手書きでつくる防災マップづくり!

地域や自宅周辺の防災マップを作成し、災害時に役立つモノや支援が必要な人等の位置や対処方法等を確認して、災害に備えよう!

▶ 1. 防災マップとは

皆さんの住む地域の指定避難所や災害時に役立つもの（防火水槽や防災倉庫等）、災害時要配慮者（乳幼児や高齢者等）が住んでいる家、危険な箇所等を、地域に住む皆さんが主体となって書き込んだ地図が「防災マップ」です。

防災マップづくりを進める中で、自分たちのまちの再発見、防災に関する地域の課題が見つかるとともに、多くの住民の方の参加による地域コミュニティの活性化、災害に強い地域防災力が生まれていきます。

地域に住む皆さん自身が、地域の防災情報を共有して、災害時には、あわてず冷静にすばやく適切な対応ができるように備えることが大切です。

▶ 2. 防災マップ作成の手順

(1) 防災マップ作成前の準備

- 自治会及び自主防災組織の役員が集まり、運営体制、運営側の役割分担及び実施スケジュールを打合わせる。
- 作成に必要な資料や物品を準備する。

- ・ A3サイズ用の紙
- ・ 文房具（鉛筆やサインペン等）
- ・ 指定避難所や消火栓、防火水槽、防災倉庫等を表示した地図
※ A3サイズ用の紙（カレンダーの裏でもOK）や文房具は参加者に準備してもらっても良いでしょう。

地図は参加者が手書きで作った防災マップとの答え合わせをする時に使用します。

(2) 防災マップ作成作業の進め方

- ①手づくりハザードマップの作り方や実施スケジュールを説明する。
- ②A3サイズの用紙に自宅付近の地図を手書きで作成してもらう。
- ③次のような項目を作成した地図に図示してもらう。

- ・ 自宅から30秒以内で行ける安全な場所にマーク
- ・ 指定避難場所や指定避難所にマーク
- ・ バケツで水を汲むことができる川（場所）にマーク
- ・ 消火栓・防火水槽・ホース格納庫・防災倉庫にマーク
- ・ 自治会（区）の災害対策本部が置かれる場所にマーク
- ・ 自治会長（区長）と自主防災会会長の家にマーク
- ・ 情報班リーダー及び避難誘導班リーダーの家にマーク
- ・ 避難支援が必要な乳幼児・高齢者・障がいをお持ちの方の家にマーク など

※このほかにも地域の住民で情報共有しておくべき事項を図示してもらいましょう。

- ④自宅から指定避難場所及び指定避難所までの、安全と思われる避難路を図示してもらう。
- ⑤指定避難所や消火栓、防災倉庫等を表示した地図を配布し、答え合わせをしてもらう。
- ⑥4～5人のグループになり、地域のなかで災害のときに役立つ人・モノ・場所について、地図に書き込んだり、地域のどこが弱いのか、逆に強みはどこかなどを話し合う。
- ⑦参加者全員で意見交換をしよう。



企画・運営及び作成に必要な物品の調達にあたっては、必要に応じて、県及び市町村等に支援をお願いしよう!



▶ 3. 実施状況

※写真①、③、④：南アルプス市今諏訪自主防災会
写真②：笛吹市御坂町尾山区自主防災会



①まず、参加者に対して、作業の流れを説明しましょう。



②A3サイズ用紙に自宅付近の地図を書いてもらいましょう。



③グループになり、防災に関する地域の課題等話し合います。



④みんなで地域の防災情報を共有しましょう。

▶ イメージ図(例)



分からないことや、間違いがあっても大丈夫。
あとで確認することが大切！
様々な疑問から現実が見えてくる！



NPO 法人
災害・防災ボランティア未来会
代表 山下 博史

この手法で防災マップを作るメリットとして、まず、自宅周辺の地図を自分で考えながら書くことで、「隣近所は誰が住んでいるんだろう？ その家族構成は(支援が必要な人はいるだろうか?)」、「指定避難所って何処にあるんだろう？ その安全と思われる避難経路は?」、「災害の弱い場所、強い場所は何処だろう?」等、自分の住んでいる地域の実情を再確認(再発見)することができます。

次に、子どもから大人まで紙と鉛筆さえあれば簡単にできるため(費用もほとんどかかりません)、地域に広がりやすいです。このため、家族単位から地域単位と幅広く、地域の防災情報等を共有することができます。

防災マップづくりは、市販されている地図や都市計画図を利用して行う方法もあります。

どのような方法で行うかは、その地域の実情に合った手法で行うことが大切です。